

札幌会場

白老のアイヌ語を追う

8月8日（火） 15:30～17:00

講師

白老アイヌ語教室講師 大須賀るえ子



イランカラプテ。イランカラプテは、「こんにちは」という意味です。私は白老町から来ました大須賀るえ子と申します。今日は、私なりに考えていたり、活動していることをご紹介しますが、まず私が、どのような者であるかを知っていただきたいので、私の先祖の紹介をさせていただきます。早速ですが、スライドを見て頂きたいと思います。

【スライド1】この写真は、私の祖父・宮本イカシマトクと祖母・宮本サキであります。祖父は明治9年、祖母は明治14年生まれです。祖母は口の周りに入墨をしており、手の周りにも入墨をしていました。祖父たちが生まれた頃は、すでに開拓使により同化政策がなされていました。同化政策は明治4年10月8日に制定され、その内容は、その家の奥さんやお婆さんが亡くなられた場合に家を焼く習慣がありましたが、それと入墨、耳輪などが禁止されました。その他にも禁止事項がありますが、今回は省かせていただき、入墨と耳輪の話をしたしたいと思います。

女性は10歳くらいになると口の周りに少しずつ入墨をし始め、大体10年くらい、結婚するまでに完成させて、それが整ってようやく結婚できる資格を持つことになるそうです。しかし、ただ形が整ったら結婚できるというものではないそうで、瀬川清子氏の著書『アイヌの婚姻』（未来社刊 1972）に、結婚の条件として当時の人たちの考え方が書かれておりますので、読んでみます。

（胆振国白老・宮本サキ、71歳、昭和26年聞き取り）「みな嫁をとるが、女の子ばかりだと婿にもらうこともある。女25歳、男30歳、男女ともその年頃にならないと結婚しないのは、畑のものが実がいらぬと同じで、骨がいたわいからだ。」骨がいたわいという意味は、十分に骨が出来ていないということだそうです。「おれが6つの時にここは密林だった。海の魚をとるにも川の魚をとるにも槍だ。山のこまい鹿をとることも親に教えてもらうが、この年齢にならぬと骨がきりっと揃わぬ。」つまり、まだ18、19の年頃では仕事も充分できていないし、結婚しても十分立派

な子供を産めないという考えであったようです。女の子は、お母さんやお婆さんから教えられて将来、主婦として家を守っていくための色々な仕事を身につけるものですから、大体25歳ぐらいになりますと体格もしっかりしてくる、ということを行ったんだと思います。

白老ではこの入墨の習慣がずっと続けられており、明治30年代くらいで一般にやめられるようになったということでもあります。これは、藤村久和先生の聞き取り（季刊人類学1-4 田畑アキ口述 S44年）の中にも書いてあります。白老ポロトコタンで伝承活動をされていた静内出身の織田ステノさんは明治32年生まれ、其浦ハルシヤさんは明治34年生まれで、兩人とも亡くなられましたが、口の周りに立派な入墨をもっていられしていました。その方たちは明治32年とか34年生まれですので、静内地方では大正時代に入ってから、この風習が続けられていたのではないかと思うわけです。何故ならば、生まれてすぐに入墨をするのではなく、初潮を迎える頃といえますから、10歳前後かなと思うのですが、それから少しずつ大きくして完成させるわけで、その時までに結婚してやっていける技術を仕込まれて、そして入墨も完成し、それで結婚できるということでした。

入墨というのは大変痛いもので、初めは泣きわめくので、年寄りたちが手足を押さえつけて行うそうですが、しかし段々歳がいきますと、「痛くても、とってもして欲しいもんだ」と白老の野本フラキテさんという94歳のお婆さんが語っています。「入墨を嫌がると、また入墨をしていないと嫁に行かれぬ。死んであの世にいても仲間に入れてもらえない。仲間に入れてもらうには竹のマキリ（小刀）で切られる。」などといわれるとあります。つまり入墨をすることは、一人前の女性であることの顕示であり帰属意識に基づく化粧であった、と思われます。しかし一方、和人にアイヌの女性が陵辱されたり、さらわれたりするので、それを阻止するために入墨をした、と述べている人もいます。民俗学者の瀬川清子氏の『アイヌの婚姻』

は、アイヌの古老から聞取りしたもので、これを読みますとその当時のアイヌの人たちの生活ぶり、ものの考え方がお分かりいただけると思いますので、是非お読みください。

口の周りが終わりますと、その後、手の甲や腕にもいれます。[スライド2]これは私のお婆さんではなく、胆振の東の方の人です。口の入墨の形は地方によって特徴がありますが、手の方は大体同じ様な形ですね。手にするのは、ちょっと信仰的な意味もあります。女の人は色々な仕事をするので、手が器用になるようにとか、何でも出来るようにとか、そのような願いが入っているらしいです。その証拠として、例えばどこか体が悪いところがあれば、そこにもするということがあったようで、十勝地方で肩などに施された例、また弓が上手になるようにと、手の甲の指の付け根に施された例が記録にあります。白老の例では、眉を削り落として一文字に入墨を施していた女性、眉と眉の間の間に一文字に入れていた男性の記録があります。

次に耳輪ですが、この風習は男女ともにありまして、私の祖父母も今で言うピアスのようなものをつけていました。耳輪は直径6～8cmくらいあり、大きいものです。明治4年の開拓使による禁止事項に男子の耳輪がありますが、相変わらずその風習は続けられ、明治9年生まれの祖父の耳には穴があいていました。穴どころか、喧嘩をした時に引き千切られたそうで、耳たぶが切れていたのを覚えております。この祖父が亡くなった時、私は高校生でしたので、よく覚えております。

[スライド3]次に祭壇（幣棚）ヌサと言いますが、ここにたくさんの頭蓋骨があります。これは熊の頭蓋骨でイヨマンテ（熊の霊送り）の時とか、ホプニレ（山での霊送り）の時の頭蓋骨なのです。私の祖父はイソノクル、猟運に恵まれた人という意味ですが、たくさんの熊を捕り活躍しました。若い時はラッコ船というものに乗りました。ラッコ船については、『アイヌ民族誌 上巻』（第一法規出版1969）に書かれております。祖父は若い時、農商務省の委嘱を受け、明治30年頃から約20年間ラッコ船に乗りました。行き先は、千島沖、カムチャッカ、ベーリング海沿岸、アリューシャン列島など北太平洋岸で、回遊しているラッコやオットセイをたくさん獲っていました。

「そのころのおっとせい狩りは、海上の波間に浮いて休んでいるおっとせいに母船から出す小舟で接近して、銃で捕殺する方法であったから、その射手の腕次第で能率が非常に影響された。ところがあたかもその時代にはアイヌが従来の北海道の天然の鳥獣や魚類で生活していたいわゆる漁猟生活から農耕生活に転向せざるを得なくなっていた。狩猟にかけては先天的に特殊技能を持ち、近代的銃猟にも慣れて来たアイヌのマタギ（狩猟者）の中には率先しておっとせい船の射手に応募した。」この応募した中に私の祖父、宮本イカシマトクも入っていたわけです。

「その中でも室蘭イタンケの」、イタンキの誤りだと思いますが、「神成三郎、幌別の志家波造兄弟、白老の宮本エカシトクマ」、これもエカシマトクの誤りです。「などは名射手として数回もおっとせい船でアリューシャン方面に出

猟した。山野を自由に放浪するマタギが、一挙に孜々営々の農耕生活に入ることに耐えなかった一面もあるが、宮本が語ったところによると、それよりも地元にはアイヌといわれて、とにかく軽べつされがちで不快であるが、おっとせい船の射手になると当時の海外航海者の慣習で、射手は高級船員の待遇で、金筋入りの帽子に金筋の肩章で、横浜の町を歩いても下級船員が敬礼をした。これが自分にとって何より満足であったという。アイヌとおっとせいの関係は、民族の変遷の一場面を物語る好資料といい得る。」その当時「船主が北海道に来て直接交渉にあたり、希望者を伴って一応東京湾で射撃試験をして採用したが、アイヌの射手はほとんど全員が合格した。」ということです。当時日本、アメリカ、イギリス、ロシアの4カ国がオットセイを盛んに乱獲したため、またたく間に資源が10分の1以下に減少したといわれます。明治44年に、この4カ国によりオットセイの保護条約が締結されております。このことが、『北海道大百科事典 上巻』に書かれておりますので、後ほどお読みください。そこには書いてありませんが、日本は相変わらず捕り続けたそうで、祖父や父からも、密漁していたと聞いております。その出猟も、第二次世界大戦の頃には止めざるを得なくなり、祖父は海から陸に上がり、今度は熊猟をやることになります。早春の2月から3月は長男と共に熊猟に励み、山で捕れば、山でのホプニレ、子熊がいれば子熊を連れてきて1年間養いまして、イヨマンテを行ったのです。

『アイヌの婚姻』の祖母の口述に戻り、その部分を読んでもみます。（胆振国白老・宮本サキ、71歳）「堤防地に稗・粟を植えた。ゴミを焼いた灰をばらっとやって。昔はあちらこちらとやるので3年たてばクビタ（古畑）で、肥なしさ」。クビタは、アイヌ語かどうか分からないですが、おそらく畑を捨ててしまうことで、また新しいところを開墾して、そこに植えるのだと思います。＊

「女ばかりやった。薪取りも女さ。薪にも困らぬ。乾いたのから燃やすので煙がたたないし、火も大きい。帆前船できたシャモ（和人）の家が10軒ほどあったから薪を1間35銭に売った。シャモのヤマゴ（木挽）がきたので、米・味噌・煙草もきた。綿の反物は1反50銭、はな染は40銭だった。山さ熊の皮を剥ぐにもいった。指を切っても熊の油をつければなおる。おれの家の鍋は大きいのと小さいのと二つで、粟の固い粥・熊の肉・川の鮭を食った。晩めしは少し明るいうちに食うが、おそくなると白樺をねじったのを焚いて明るくした。いつもはだし、冬は鮭を開きにして干して身をとった鮭の皮のケリ（靴）をつくって、沼からポプケキナ（草）を刈って干したのをなかに入れてはいた。ブドーの蔓の草鞋もはいた。キナは勝手にとるが、昔は、早くキナを刈ったから霜がふったんだ、といってさわいだ。」と語っています。こんなこともあったのですね。

「ここは5月まで雪がある。家は東窓がひとつ、南窓がふたつ、そのほかに窓がない。入口が西に向った奥ゆきの長い柱なしの家さ。今度炭焼きにいつてる息子が、熊の足跡をみつけてから3日間追って、大熊が穴にはいったのを

捕ったので、これからデメン（賃金）だして人を10人もたのんで運びにいくところだ。7里向うの山だが、ここから3里いくと雪の山だ。20歳になる末の娘もいっしょにいくはずだ。この末の娘が私の叔母にあたる宮本ミサで、今74、5歳になりますか、この人だけが元気で生きております。

「度胸のある人でないと、山にいかれない。猫ぐらいの熊の子を、私と、この娘の間にねかせて育てた。しっこだな、と思ってねどこからとってだすと、よちよち出ていって、しっこして、大便して懐にもぐってくる。すり鉢で飯をすって、中白の砂糖を混ぜて食わす。少し物を食うようになればジャガ薯と大根葉と鰯と鰯の油、それに塩を少し入れて食わせる。だっこしてねているうちに犬くらいになると檻に入れるのだが、一週間は私のところにきたがって泣く。私がそばにいくと私の手を口のなかに入れておもちゃにする。25、6匹も育てた」と語っています。祖父が熊猟をすると、雌熊であったなら親熊はそこで殺して、赤ちゃん熊は連れて帰るわけです。「あまり小さくて抱いてねたのは2匹、そんなのは、私より背が高くなっても私に馴れているので、逃げだしたときにはロップ（綱）かけるのも私だけだ。」というふうに言っています。

昔白老のコタンは海沿いにあり、和人の人たちは線路から山側に住んでいました。山側に熊が逃げたとき、当時犬は繋いでいなかったの、犬は追いかけて、人も大騒ぎして、熊としては折角逃げ出したのに、恐ろしい思いをしたのだと思います。祖母が縄を持って駆けつけると、すっかり親のように思っているので、祖母の両肩に前足をかけて、まるでおんぶする格好で家まで歩いて戻ったそうです。その時、周りで大騒ぎするので、熊が恐ろしがってフェー、フェーと鳴くので、いつ噛みつかれるかと冷や汗を流しながら連れ帰った、という話を私は聞いております。このように熊をたくさん捕り、したがってイヨマンテも数多く執行されたわけです。

昭和20年まで、白老で個人でイヨマンテをした家は、祖父の家が最後でした。白老アイヌ語教室の講師を務めていた、故松永タケさんは、「子どもの頃、母に手を引かれ宮本家のイヨマンテに行った。手に脂をつけて握り飯をたくさん作るんだ。その握り飯のうまかったこと、忘れられない。イヨマンテがあると、それが楽しみで行ったものだ」と語っていました。タラの脂をたくさんとっておき、あらゆる料理の調味料にしました。私の叔母もイモの塩煮をしますと、それにタラスム（タラの脂）をつけて美味しい、美味しいと言って食べるので、やはり子どもの時から馴れた味が一番おいしいのでしょう。

祖父のところには、言語学者の金田一京助氏、地名学者の山田秀三氏、家屋研究の鷹部屋福平氏、名取武光氏など多くの学者がおいでになっています。祖母は瀬川清子氏の取材に協力し、『アイヌの婚姻』の中に多くの口述を残しています。このように祖父母が自分たちの生きざまや、アイヌの智慧をたくさん語ってくれたおかげで、数十年と経った今、孫である私がその文献に接することができ、大変うれしく思い感謝しております。また、彼等がアイヌとし

て、しっかりと生きたのだということに感心し、誇りにも思うわけです。

鷹部屋福平氏の資料が『北方文化研究報告 第一輯』にあります。そこに「宮本伊之助 舊土人名イカシマトク」となって載っていますが、伊之助は後からつけた和名でして、アイヌ名はイカシマトクとかエカシマトクとか両方あります。どちらが正しいのかわかりません。その当時63歳でした。家の構造などにも大変詳しく、来訪者には親切に教えてあげたようです。

「(前略) エカシは実に種々なことに就て詳細な説明をした。其れは簡明であり、ポイントを掴んで居つた。昔は…」と何ページにもわたり口述を残してくれています。何故、詳しいかという、アイヌの人たちは自分たちで家も作るし、大工も、漁師もする、何もかも全て自分たちでやるので、みんな専門家になるということです。でも、学者が研究調査に来られても、どこの家にも行くというのではなく、やはり受け入れる家は限られていたようです。それから名取武光氏の著書に、矢花とか、イナウの数などが詳しく書かれておりますので、後ほどご覧下さい。

白老のアイヌは半農半漁の生活で、春の3月から5月は日本海方面のニシン漁の出稼ぎにほとんどの人が出かけ、女も男も魚が来るとみんな行っており、うちの祖父母も行っていましたし、何でもやるわけです。マタギだからマタギだけやるのではなく、時期ごとに何でもやるのが、アイヌの人たちの生活でした。6、7月になると太平洋側のニシン漁、8月はイカ漁、その後はマス、サケ、雑魚漁と、年中忙しい日々を過ごしました。また農業では、戦争中は大根栽培が有名でした。白老は火山灰地なので水田はだめで、畑作が主でした。冬は雪が少なく、地面がしばれるので、虫や菌はつかず、大変たくさん採れたということで、戦争中は旭川の第7師団へ貨車で大根を輸送したそうです。白老の農産物のうち、実に7〜8割が大根であったということです。それから冬になりますと、ポロト湖の氷切りも盛んに行われました。それまでは函館、大沼方面の氷が主であったそうですが、ポロト湖の氷の質が良いということで、大勢の人が氷切りに関わりました。当時は氷蔵というのがあり、氷の間に、のこ屑をかけて高く積んで貯蔵し、貨車で道内や本州の方にも出荷していたそうです。戦後になって冷凍機が登場し、この仕事は終わりを告げました。こうして色々考えると、コタンの人々はアイヌ文化を守りながら、和文化も取り入れて、したたかに生き抜いてきたのだと私は考えております。

これまで前置きが長くなりましたが、今度はアイヌ語について述べたいと思います。白老には、今から145年前の安政3年に仙台陣屋というのが造られました。それは蝦夷地警備のため、明治政府ではなく、その前の幕府の政策で仙台藩の陣屋が構築されたのです。元陣屋は白老に置き、厚岸の方まで出張陣屋を置いて、何人かの出張員というか役人を派遣して警備に当たっていたようです。白老が一番規模が大きく、陣屋を建てた時にはアイヌの人たちも労働力として大勢駆り出されたということが記録にあります。したがって、そこに住んだわけですから子種を落としたとい

うこともあって、アイヌの人たちの系譜を調べると、仙台陣屋の殿様の子孫だというのが時々できます。そしてアイヌは、どのような子どもでも排斥することなく、神の贈りものとして大切に育てあげています。このところが和人と大きく違う点で、私は特に感心しているところです。

ところで白老は200人もの藩士が入ってきて、急速に開けていきました。家屋や生活ぶりにも和風を心掛けるアイヌの人たちが増えていきました。コタン（アイヌ集落）に小学校ができて、和人の先生による教育が始まるとともに、アイヌ語が次第に消えていきました。親たちは、「これからは和人の中に混じって生きていくので、アイヌ語はいらない。学校でしっかり勉強しなさい」と子ども達に諭したといいます。白老は他の地域とくらべると、あまりにも早く開けてしまったために、言語については寂しいものです。他の地域では、アイヌ語を母語とする話者が健在でおられますよね。十勝には澤井トメノさん、鶴川には新井田セイノさんがおられます。平取にも上田トシさんをはじめお話のできる方がいらっしゃるし、千歳では白沢ナベさん、小田イトさん、今はもう亡くなられましたが、最近までその土地の言葉を伝えておられたのです。ところが白老では、遙か昔にお話のできる方は亡くなっており、文献も少ないわけです。ですから、他の地域では方言辞典が出ておりますが、残念なことに白老ではそういう文献も少なく、お話できる人もいないということで、アイヌ語に関していえば、本当に寂しい現状でございます。

昭和9（1934）年に久保寺逸彦氏が知里真志保氏と共に白老に研究調査に入っており、その時に私の祖父母、曾祖父、親戚からカムイユカラ（神謡）とか、ウエペケレ（昔話）、シノッチャ（即興歌）、ヤイサマ（民謡）などを採録し、その音声テープが道立図書館に収められています。また、最近、道立アイヌ民族文化研究センターというところができ、そこに久保寺逸彦文庫資料として収蔵されています。是非とも私の先祖の声がほしいのですが、色々と制約があり、直系の孫であっても、もらえないのが現状です。また、北海道大学の北方資料室にも同じ白老の音声テープがあるそうなので、少しでも資料を下さるようお願いしているところです。

私のアイヌ語の思い出としては、小さい時に私は鼻垂らしだったので、祖母はいつも私の顔を見ては、鼻をかめということをアイヌ語で「エトゥカレ」と言っていたので覚えてしまいました。それから、1から10までの数え方。それが、平取地方や千歳とは違い、白老では、シネブ（1）、トゥブ（2）、レブ（3）、イネブ（4）、アシク（5）、イワン（6）、アラワン（7）、トゥベシ（8）、シネベシ（9）ワンペ（10）と言うのです。小さい時に覚えたので、他の言い方がなかなか言えなくて困ります。『アコロ イタク』にも、そういう数え方もある、と出ていますが、数の数え方は、やはり研究者のいるところ、二風谷、千歳、本別とかの言い方が広まっていて、白老の言い方が取り上げられないのは何か寂しい気がいたします。数の数え方ばかりでなく、白老独自のアイヌ語が使われていたと思うのですが、資料も少なく、学者の方も「白老は分からない」とお

っしゃいます。昭和34年に収録された上野ムイテクンさんのカムイユカラ、イフムケ（子守唄）のテープが入手できましたので、少しずつその練習を始めています。また、昭和45年の収録で森竹竹市さんのカムイユカラのテープもいただいておりますので、この中から白老の言葉を少しずつ拾い集めていきたいと考えております。

最近、様似のアイヌ語教室では、故岡本ゆみさんと旦那さんの音声が入ったHBC（北海道放送）に収蔵されていることがわかり、そのテープを入手され、様似方言をまとめました。その報告書を見ますと、地元の関係者が何年もかけて資料調査や聞き取りをして音声のありかを突きとめるなど、よくがんばったな、と頭が下がります。研究者の方々も協力されて立派なものができ、本当に羨ましく、また素晴らしいなと思います。私も触発され、何とか資料などを集め、薄い冊子でも構わないので白老方言をまとめてみたい、祖父母の言葉を取り戻していきたいと考えております。

様似方言を見ますと興味深いのは、「行く」が「オマン」と出ており、白老も同じく「オマン」なのです。それから、「～と言いながら」というのは、「～アリ ハウキ カネ」と言いますが、「アリ」は平取や千歳では「セコロ」と言いますが、白老では「アリ」で様似と同じでした。例えば「パロ」と「チャロ」は口の意味なんですけど、「パロ」と「チャロ」の方言の分布図の勉強をしたことがありますが、同様に「オマン」と「アラパ」（行く）の分布図ができれば面白いかなと思います。

アイヌ語は面白いことに、分解できるものが多いのです。例えば、「オ・シク・コ・テ」という言葉があります。「そこに・目を・くっつけ・させる」という意味です。そこから目が離せないということから、「惚れる」という意味なのです。また、蜚のことを「ニンニンケッポ」という地方と、「トムトムキキリ」という地方があります。「ニンニンケッポ」は、「消え消えさせるもの」という意味で、「トムトムキキリ」は、「点き点きする虫」のことです。これは、物事をどのように捉えるか、によって表現が変わるので面白いと感じています。例えば氷だと、凍るものではなく、解けるものと考えたわけです。そこが私には面白く、アイヌの人のものの考え方とか、見方とか、表現の仕方というのは、実に素朴で直接的で愉快なもので、読んでいると思わず笑ってしまうところもあり、ますます魅力を感じてしまいます。今、アイヌ語は地名や動植物の名で多少残っておりますが、地名は現場に行くと元の意味とはずいぶんと変わってきています。情勢や地形の変化で、必ずしも一致しないこともあります。是非これ以上アイヌ語の地名や動植物名を消さないでほしいと思います。

【スライド4】この写真は昭和10年頃に撮った祖母と父です。普段はこのような格好をしています。アイヌの人は、みんないつも、あの独特なアイヌ文様の着物を着ていると一般の人は思っているのではないかと考えます。観光地でもそうですし、何かのイベントがあれば盛装をするので、一般の人はアイヌの人は四六時中こういう着物を着ているものだと思われているのではないかと。それは、やらせ

る方だけではなく、私たちの方も考えていく必要があると私は思っています。今は農業、漁業や商業といろんな職業をもって生活しているのですから。

私の6人の兄弟姉妹は健在ですが、実はこのうち2人しか北海道ウタリ協会に登録していません。4人は同じ両親の子でありながら、ウタリ協会に入っていないのです。ですから、よくアイヌの人が何人いるかと聞かれるのですが、本当にアイヌとして生きたいと思っている人、あるいは、文化などを伝承しないまでも、補助などが受けられるから仲間になっている人と目的は様々で、アイヌとして意思表示をしている人は2万3～4千人とかいいますが、実際は北海道だけでもその10倍はいるのではないかと考えています。今年の5月に東京のアイヌ文化交流センターでお話をする機会をいただきましたが、その時に聞いた話では、関東一円でアイヌの人は5千人ほどいるそうです。でも、その人たちの全てが活動しているのではなく、ほんの一握りの同じメンバーが度々集まって活動しているということでした。北海道はアイヌモシリだというのに、関東の4倍ちょっとしかアイヌがいらないなんて私には考えられません。

【スライド5】次は、「やらせ」かもしれませんが、私の祖父の写真で、鮭かマスを鉗で突いているところです。この写真はあちこちに出回っており、これを見たことがあるという方が多いのです。まだ髪の毛が黒くて、だいぶ若いころですね。

【スライド6】これがイヨマンテの時の祖母のスナップ写真です。普段はこんな格好です。本当の儀式の時には、ちゃんと盛装したと思いますが、この時は色々な作業をするので、たまたまこの様な格好をしていました。いわゆるアイヌの着物は、普段は着ることはなく、イヨマンテとか結婚式など儀式的時に着るものなのです。

【スライド7】これは、私の女の系統の曾祖母と祖母と叔母です。この叔母が1人だけ、今75歳で生きています。熊の檻は、いつも大体二つありました。熊は春早々に赤ちゃんを産むのですが、2匹が多いそうです。これは昭和6年の写真で、翌年の2月9日に、この2匹のイヨマンテをしており、河野広道氏の文献に詳しく載っています。

【スライド8】これが「チセ(家)」の写真で、祖父母はこのような家で暮らしていました。私は昭和15年にこの場所で生まれました。残念ながら翌年、写真業を営む父とともに鶴川町に移ったので、実はアイヌ文化をほとんど分からないまま成長しました。50歳になってから自分の血が騒いだというか、目覚めて、ぐっと入り込んでしまいました。この屋根にはありませんが、大正14年、北海道大学の八田三郎教授が制作したアイヌ文化紹介の映画では、屋根の上に台があり、イヨマンテの場面でそこに祖父が乗って、クルミとか色々な食べ物を撒いていました。思いがけなく、若かりし頃の祖父の映像に出会って感激しました。これというのも、アイヌのことをやっていたからなんですよ。

【スライド9】これは家の中の様子です。壁に立てかけているのは花ゴザで、儀式的時に壁に立てかけたり、床に敷

いたりします。文様のないのは普段に敷いたり、くるくる巻いて枕にしたりしていました。後ろにある漆器類は、宝物として大切にしていたもので、先祖から伝わったものもありますが、ここにお客さんがどんどん来るようになり、近隣の人たちから、いらないから買ってくれと言われて集めたものです。こんなものを持っているとアイヌと言われて嫌だからと、焼いた人もあったといえます。床は板張りですが、昔は草を厚く敷いて、その上にゴザとか毛皮を敷いていたので、結構暖かったそうです。「明治になってから不衛生だから板張りにせよ、とのお達しがあり、板張りにしたら寒くて、冷たくて困った。リュウマチの病気がそれから始まった」と祖母は言っていました。また、壁には相当数の刀がぶら下がっていました。これらも宝物として、大切にしてきたものです。しかし、戦争中に鉄を提出させられた時、中の刀は抜かれてしまったので、鞘だけが壁を飾っていました。

【スライド10】これはお墓で、白老地方ではこのような墓標なのです。男性は槍の形をしていて、女性は針の頭のように穴があいています。黒い布を必ず穴を通してぶら下げていました。針と糸に見たてたものかと思います。また、男女とも作業をするときは髪がパサパサにならないようにするため、チパヌブといって黒い布を頭にしばっていました。男性の墓標にも黒い布をぶら下げますので、チパヌブに見たてているのかなとも思います。静内地方へ行くと、T字型の女性の墓標にも黒い布がぶら下がっています。Y字型は男性のもので、やはり布をぶら下げているものもあります。それで、墓標の上部を人の頭と考えて、チパヌブをつけていると考えられるわけです。

【スライド11】これはお産の様子ですが、これも「やらせ」ではないかと思います。このような時、盛装するはずはないからです。囲炉裏の側に座ってカムイノミ(神への祈り)をしているのは曾祖父・木村エカシラチです。この人の音声、久保寺逸彦氏の昭和9(1934)年の研究調査の時の音声資料の中に入っています。

【スライド12】これは祖父の若い時の写真で、ここにもたくさん熊の頭蓋骨があります。ヌサの頭蓋骨はそのまま放置され、風雨にさらされると次第にひび割れてずるずると下に落ちていきます。下に落ちたものは、そのままにして何もしないようです。お墓なんかもそうで、白老の場合は、早くからお坊さんや神主さんが入ってきたので、半分はアイヌ式で、半分は和人式という感じに、どんどん和風を取り入れて混ざった文化をやってきました。ですから、本当はお墓参りはないのですが、白老では結構昔からお墓参りをやるようになったということです。私も幼い時、祖母の後ろにくっついて何ヵ所もお墓参りをした経験があります。今なら、何々家の墓ということで1ヵ所で済むのですが、昔は一人一人土葬しましたので、何ヵ所も巡るわけです。墓標は絶対建て替えることはしないので、次第に朽ち果てていきますが、その場所は分かるから間違うことはなく、お墓参りできるのです。

この後は、何か質問があれば受けたいと思いますので、どうぞおっしゃってください。何でも結構です。

質 問：アイヌ語の名前はいつ頃まで付いていたのですか？今でも付いているのですか？

大須賀：今は付いていないですね。明治4年に戸籍法ができ、それまでアイヌには名字がなかったので、中央から役人が来て付けました。

萱野茂さんの話ではこのようにおっしゃっています。役人が、駅前の旅館に泊まり、ずっとその辺を見物し、おいしい物を食べつつ滞在し、明日は帰る予定の土曜日になって、その地域の顔役の人にアイヌを集めろと号令をかけ、みんなが集められてくる。そして、「お前の住んでいるところは、どのようなところだ」と聞くと、「萱がいっぱいあります」と答える。「それでは萱野にしろ」。「川に何がいるのだ」、「貝がいます」、「それでは貝沢にしろ」と、そのように名字が付けられたといひます。ですから平取では、親戚でもないのに貝沢がすごく多いのだそうです。

うちの場合は、名字は宮本です。私は白老の観光地におりますので、たまに観光客の同姓の人から聞かれるのですが、どうして宮本となったかは分からないのです。それで、アイヌの人の名字はこんなふうに付けられたそうです、と萱野さんの例を申し上げています。

名前の方は例えば、熊坂シタツピレさんとか宮本エカシマトクとか、いろいろな名前の方がいます。私の父の名は登（のぼる）といいまして、アイヌの名前はありませんでした。長男も芳雄（よしお）というのです。祖父・エカシマトクは伊之助という和名を後からもらっていますので、二つの名前を持っています。

質 問：それでは、お父さんの世代にはもう付けなかったということですか？

大須賀：父親の時代には、付けられませんでした。父は大正2年生まれで、長男にしても明治40年くらいの生まれなのですが、アイヌ語の名前ではありませんでした。父は観光地で働くようになって、アイヌレヘ（アイヌの名前）が必要だということから、おじいさんの名前を拝借して説明係をやっていました。『北海道大百科事典』という定価36,000円もする辞典に、宮本エカシマトクの顔写真が間違っていて載っているのです。掲載されている写真は、私の父なのです。これは、昭和56年に発刊されたもので、今更言ってもどうしようもなく、消すにも消せません。おそらく、父がお爺さんの名前を拝借してポロトコタンで16年間、説明係をやっていたので、それで間違っただと思います。

質 問：ヌサ（祭壇）の写真がありましたけど、現在はどうなっているのですか？

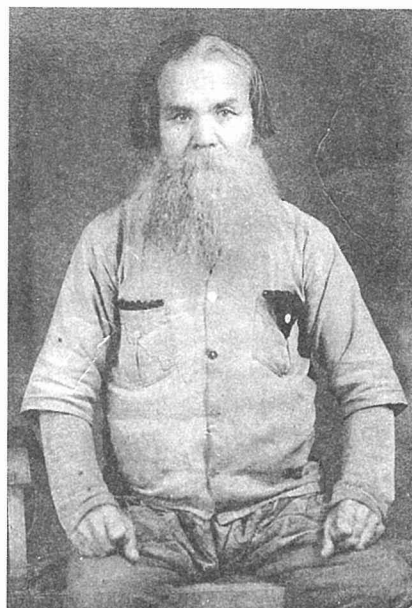
大須賀：今はもうないですね。きれいに送ってしまったのです。先ほどのヌサは旧コタンの宮本の家があったところのものです。東窓の10メートル以上先の方に大きなヌサがありました。祖父、祖母が亡くなったのは昭和32、33

年ですから、40年ぐらいも前で、後継者もまもなく亡くなったのです。そして周りは住宅地で密集しましたし、そこは神聖な場所なものですから、木やなんかが大木になって鬱蒼と茂って藪のようになっていました。最近、見に行ったらきれいに整備されているようでした。

昔、白老の浜のほうに共同の送り場があったのですが、世代がどんどん新しくなり、送りのやり方も分からなくなって、いくらかでも分かっている最後の人たちが、もうこれは片付けようということで送ったということです。熊坂シタツピレさんという人は熊捕の名人だったのですが、昭和17年に亡くなりました。奥さんもその2、3年前に亡くなっていて子供もいませんでしたので、地元の研究家であった満岡伸一さんもそちらに案内できなくなりました。満岡伸一さんは、郵便局の局長さんでしたが、アイヌのことを研究され、皇族の方とか、役人、学者の方とか、いろいろな方と懇意で、70軒ほどあったコタンの中を案内していました。しかし、ほとんどが漁師で、個人の生活の場をのぞくわけにはいきませんから、私の先祖のところとか、熊坂さんのところとか、他には、森竹さんのところも二代くらい前はイヨマンテをやっていたので、イヨマンテをやるところに案内しているうちに、段々と自然発生的な感じで、白老が観光地になってしまったわけです。でも、そこは設備も不十分で、近くには学校があり、環境として思わしくないとのことから、道庁や町役場の指導の下、昭和40年に今のポロトコタンに移設しました。

残念ながら、もう時間が来てしまいました。長時間私のつたない話を聞いて下さいまして、ありがとうございます。イヤイライケレ。

* クピタ（kupita） 中州：水面に出ている砂地。（クピタトイ；1、2年で使い捨てにする砂地畑）



宮本エカシマトク